ら恐ろしい核のゴミと隣り合わせの生活を続けるのか、脱原発に向けて生活を見直すのか、が問われている。それを考える素材となり得たかどうか。会場に用意した感想文に残された多くの感動的な文章の中から、ごく一部の抜粋をご覧頂きたい。

写真、子どもたちの絵、どれも目に浮かんできました。今、私たちは豊かで平和な生活を送っている中、このような生活を送っている人たちがいることは決して忘れてはいけない。学校では、事故があった、とさらりと流すだけなので、この忘れてはいけない事故をもっと多くの場所で、多くの人々に、このような写真展で見ていただきたいです。すばらしい写真展、ありがとうございました。

高校３年生

汚染された物や人・食物・緑・空が怖かった。気力のない、子どもとは思われない子どもの表情や、自分で成長する力を失った子ども、首に深いメスのあとをのこされた女の子。これからがたくさん残されている子どもの、これからをうばってほしくない。

私にできること、考えます。

２１才　学生

文字では伝わりにくいものが、絵で見ると一瞬で、その恐ろしさが実感できました。月末に学習会をやり、１０月には原発に出向き見学します。その必要性が今回の写真展で、より重要なことと感じました。私たち若い世代が、よく見て、よく知り、次の世代へ受け継ぐ義務も痛感させられました。

２１才　労組書記

忘れ去られてはならない、二度と起きてはならないチェルノブイリの事故。他所の国の出来ごとではない。私たちの住む愛媛にも、伊方町に原発があり、使用したあとの廃棄物の処理も定かではない。こわいことです。経済、経済とばかりさけんで、必要の無いものを作り、私たちはそのことばに乗せられ、次々と新しいものを買わされてしまう。低エネ生活をして安全な生活を送る事をどうして進めないのでしょうか。といいながら私も恥ずかしい生活をしております。他人様がもっているものは何もかもほしい、ほしいと求めています。

原発の下請け、もご請け制にも、非常にうたがわしい話を耳にしております。まご請けの人がどれだけ仕事に責任を感じておられるのでしょうか。もしもの時は誰が責任をとってくれるのでしょうか。

越智郡　K.M.

会計報告（'99.9/1～9/30）

収入	
会費	１２，０００
ニュース講読料	４０，０００
コピー代	３，３００
計	５５，３００
支出	
ニュース印刷代	２３、８５０
郵送料	８、４８０
振替手数料	６８０
資料費	２，７８７
コピー料	９，２１９
計	４５、０１６
差引	１０、２８４
積立金合計	１、９４５，２４４

伊方訴訟ニュース

第 314 号
1999年10月15日

伊方原発訴訟を支援する会　連絡先 〒560-0047 大阪市北区西天満4-9-15 第一神明ビル
藤田法律事務所 電話 06-6363-2112 口座 00930-0-48780

伊方原発であふれた使用済み燃料を六ヶ所村の貯蔵プールに初搬入

９月３日午前８時１５分、伊方原発からの使用済み燃料集合体２８体（約１１トン）を積んだ輸送船「六栄丸」が、むつ小川原港に接岸した。岸壁近くでは、青森県反核実行委員会主催の抗議集会が開かれ、早朝から結集した約２００人の人たちが「返れ！返れ！」のシュプレヒコールで抗議した。

この集会に、原発反対八西連絡協議会では、別項に掲載した「連帯のアピール」を送った。

今回輸送された使用済み燃料は、日本原燃株式会社が青森県六ヶ所村に建設中の再処理工場内の使用済み燃料貯蔵プールに、第２回分として搬入された。

伊方原発からはじめて搬入された使用済み燃料は、昨年１０月に伊方から送られる予定となっていた。それが、使用済み燃料輸送容器に使われている放射線遮蔽材の検査データがねつ造されていたことが内部告発によって明るみに出たために、延期されていた。

ところが、輸送容器の製造メーカ、それに、通産省と原子力安全委員会は、「ねつ造は問題だが、輸送容器の遮蔽能力は安全上問題はない」との結論を出し、そのまま使用し続けることになった。そして、１年近くの遅れで、今回の搬入が行われた。

これまでの使用済み燃料の積み出し・輸送の場合と同様に、「核ジャック防止のため」という口実で、情報の公開は全く行われないままであった。

六ヶ所村への搬入予定が明らかになってからも、愛媛県の環境保全課は、県民からの問い合わせに対して、「搬出の日時は公表できない」と返答していた。

一方、四国電力の情報秘匿もひどいものであった。８月３０日には、伊方原発専用岸壁では、六ヶ所行きの使用済み燃料の搬出作業が朝から午後１時過ぎまで行われ、同日夕方には２器の輸送容器に納められた使用済み燃料が六ヶ所村に向けて出港することになっていた。

そのニュースを放送で知った「原発さよならえひめネットワーク」のメンバー５名が、「抗議及び申し入れ書」（別項に掲載）を携えて四国電力松山支店を訪れた。メンバーたちは、現に行われている伊方での搬出作業について抗議した。ところが、応対に出た今井総務課長は「搬出日時などは言えない」とシラを切り続けたという。

さらに、従来は搬入作業が完全に終わるまで伏せていた情報を「今回は少しでも公開を進めるよう努力した」ということで、国と四

国電力は、輸送船がむつ小川原港に入港した事実を接岸直後に発表する、という茶番まで行った。

日本原燃が建設中の再処理工場は、高速増殖炉によるプルトニウムの利用が完全に行き詰まったことと、建設費の高騰のために、現在、進捗率が１３％にすぎない工場建設について無期延期すべきだ、との声が推進派の中からも上がってきている状況である。今回、伊方からの使用済み燃料が搬入された貯蔵プールも、国の「使用前検査」も終わっておらず、その検査の試験用に使うという有様である。伊方の“トイレ”であふれた使用済み燃料を、くみ取る予定のない遠方の未完成の“トイレ”に移す今回の行事は、方向を見失った日本の原子力の姿そのものである。

伊方から六ヶ所への「連帯のアピール」

愛媛県伊方町の四国電力・伊方原発からの使用済み燃料の搬入に反対して、本日の阻止集会に参加された全ての皆さんに、伊方原発に反対し、今回の搬出、搬入に反対する伊方町と周辺住民から連帯の挨拶を送ります。

伊方原発からの六ヶ所村・日本原燃への使用済み燃料の搬出・搬入は、既に昨年１０月に強行されようとしていたが、輸送容器が安全基準を満たさない欠陥容器であることと、それを隠すために製造データを改ざんしていることが、内部告発で暴露され、輸送直前に中止となっていた。

ところが、四国電力や国は、何らの実証的な根拠もないまま「そのまま使用しても大丈夫」として、今回、欠陥容器を使用して、輸送自体が危険極まる海上輸送を強行した。

伊方原発を始め、全国の原発で使用済み燃料の貯蔵プールが満杯となり、伊方原発では、１号炉貯蔵プールに入らないため、今年１月には、３号炉プールに移す事態にまで追い込まれている。

これらの事態は、全て、建設前から「トイレット無きマンション」と批判されながら、核廃棄物に対する何らの対策を持たないままに、ひたすら、原子力産業と土建屋資本に莫大な利益を与えるために、原発推進に走り続けた通産省や政治家達の犯罪的姿勢が生み出した結果です。

通産省や、原子力に群がる利権やグループは、こうした事態に乗じて、伊方を含めた原発現地に対しては「核廃棄物が満杯なので、詰め込まないとあふれてしまう」と、貯蔵プールへの詰め込み貯蔵という危険極まりないことを押しつけ、一方で、「早く他所へ移さないと困るだろう」と、今回の六ヶ所村への搬出・搬入を正当化しようとしている。

核燃料サイクルなどという、文字通り言葉だけの謳い文句が、もんじゅ事故、フランス・スーパーフェニックスの閉鎖の事態で、全くの幻想でしかないことが明らかになった今日、六ヶ所村に搬入された廃棄物は「中間貯蔵」の名目で永久に放置されることは明白です。

しかし、核廃棄物の集中貯蔵は、米国、旧ソ連の核廃棄物の、汚染事故、爆発事故の例を見るまでもなく、地球的規模での放射能汚染をもたらす事になることは明らかです。

今や、日本列島の何処の原発や核廃棄物貯蔵場所で事故が起きても、列島はもとより、海を超えた地域にも、計り知れない放射能汚染をもたらす事になる。

こうした事実が誰にも理解できる状況となった今日、わが国のみならず、地球上の全ての原子力、核施設が廃絶されることが緊急な課題です。

人類の排出する廃棄物が、地球環境を破壊していることが問われている今日、エネルギーの無制限な消費を止め、自然の循環を持続できるエネルギーの使い方、社会のあり方が、いまこそ問われています。

六ヶ所村への核廃棄物の搬入を止め、日本と世界からの核利用、核兵器の全廃を目指して、共に闘い続ける事を誓い、阻止集会へのアピールとします。

１９９９年９月３日

伊方原発反対八西連絡協議会一同

四国電力（株）社長　　1999年8月30日

大西　淳　殿

原発さよならえひめネットワーク

抗議および申し入れ書

本日、青森六ヶ所村へむけての伊方原発１号炉の使用済み燃料の搬出・輸送の作業が行われている。

私たちは、この使用済み燃料の六ヶ所村へむけての搬出・輸送に強く反対し、怒りをもって抗議する。

伊方原発の運転によって生じた使用済み燃料＝核のゴミはあくまでも原発サイトで保管すべきであって、青森・六ヶ所村に押しつけるべきではない。六ヶ所村は核のゴミ捨て場ではない。そして伊方ももちろん日本の、世界のどこも、核のゴミ捨て場ではない。してはならない。

猛毒であるプルトニウムが大量に含まれる使用済み燃料の輸送情報を、公開せず秘密裏に行うことは、住民の生命・安全を二の次にしていることであって、全く許せない。核から住民を守ることこそ第一義的に考えられるべきである。

原発を運転する限り使用済み燃料は増え続ける。いまや六ヶ所村・再処理工場は完成するかどうかも定かではなく、一方、高速増殖炉も見通しを失ってしまっている現状では、使用済み燃料は“核のゴミ”以外のなにものでもないことは明らかである。

一度生み出してしまった核のゴミは、１００万年というような人類にとっては永遠ともいうべき期間にわたって安全に管理しなければならない。それができる保証などあり得るはずがない。これ以上、未来への重いツケとなる核のゴミ＝使用済み燃料を増やすべきではない。

私たちは、四国電力がただちに伊方の３基の原発を止め、廃炉にすることを要求する。そして六ヶ所村への使用済み燃料の搬出をただちに中止することを求める。

広河隆一写真展と子どもの絵画展
“チェルノブイリと核の大地”を終えて

原発さよならえひめネットワーク

古茂田知子

９月１４日から６日間、愛媛県立美術館分館で、表題の写真・絵画展を開催した。

２７年間もの間、１号炉訴訟と、本人訴訟の２号炉裁判を戦ってこられた原告の方々と、せめて終盤を共にしたい、県民にこの裁判を知らせたい、との願いからの催しであった。写真や絵とともに、日本と伊方の原発に関する地図やパネルも展示した。

愛媛県有機農産生協、原発さよなら四国ネットワークとその中間や友人たち約２５０名の協力はもちろんのこと、地元マスコミ６社後援の力も大きく、約７００名もの入場があった。

私たちは、大量のエネルギーを消費しなが

速報

１０月８日に開かれた２号炉公判で国側は予定通りに最終準備書面を提出。

住民原告側は、裁判所の強い要請を受け入れ、来年３月２４日に最終準備書面を提出し、弁論をうち切ることに同意しました。

（詳細は次号で）